

渡辺克己 著

豊後の
武將と合戦

【第十八章】 石垣原合戦と大友吉統 ②



●原著案内

本デジタルブックは、以下の書籍「豊後の武将と合戦」をデジタル化したものです。

「豊後の武将と合戦」

著者：渡辺 克己

A5 版 314 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2000 年 2 月 15 日

定価：2300 円（税込み）



購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
電 097-538-9662 「合同新聞の本」 Web ページ

※奥付け／デジタルブックについて

（題字と挿絵は二紀会委員・菅久）

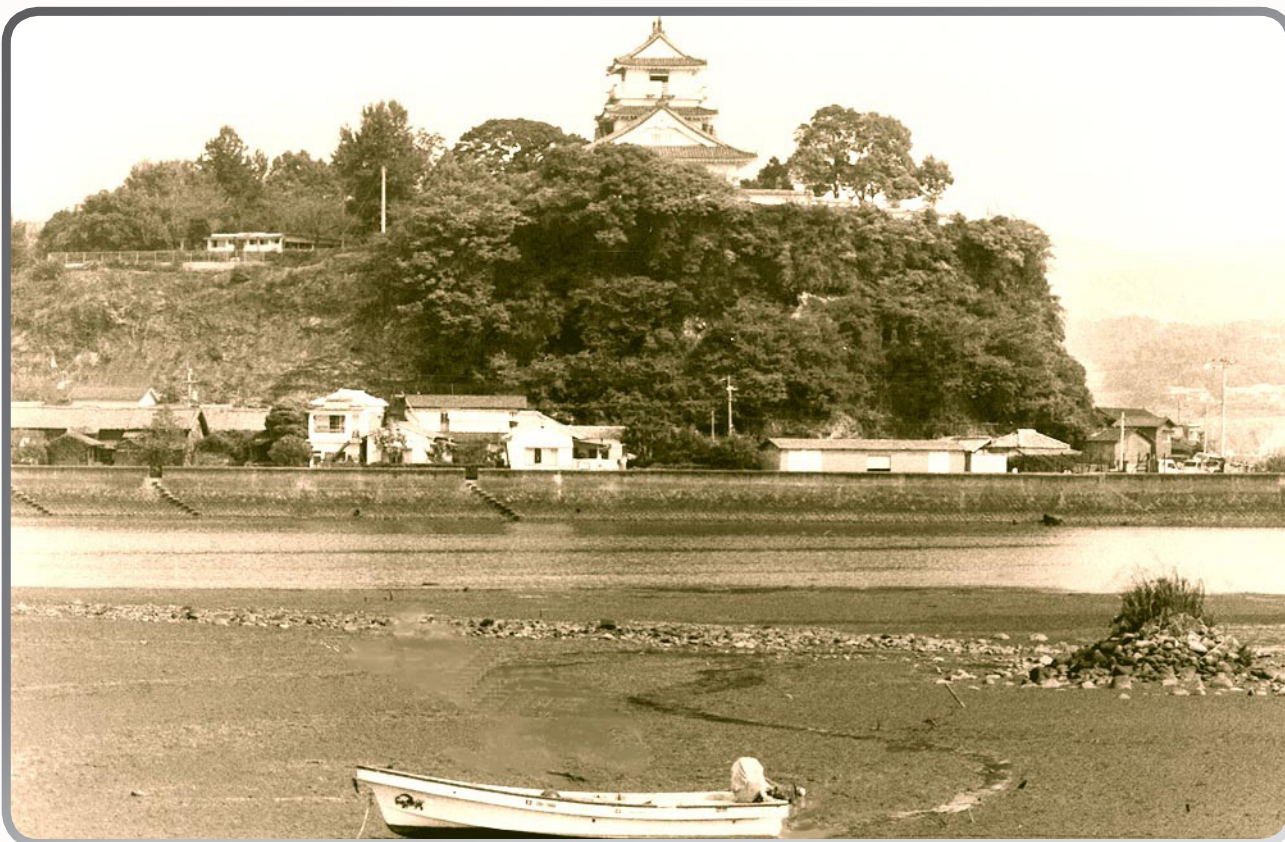
あながき

- ⑪ 余波、佐賀関合戦
- ⑩ 大友吉統降伏
- ⑨ 吉弘統幸の戦死
- ⑧ 黒田加水の好意
- ⑦ 木付城の攻防
- ⑥ 大友軍立石に布陣

【写真】 干潟の八坂川と杵築城

第十八章 ●石垣原合戦と大友吉統 ②

目次

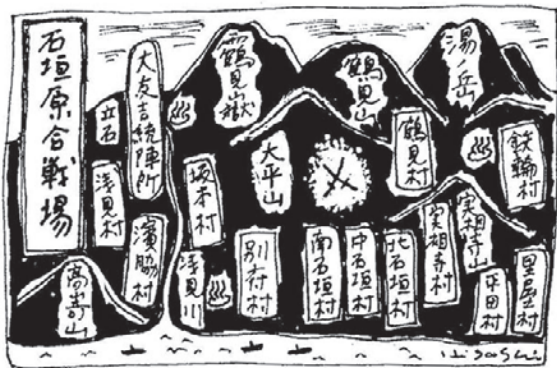


干潟の八坂川と杵築城

因縁の地を足がかりに

統幸は吉統の西軍加担を翻意させ、自分はその足で江戸へ行き、吉統の長男能乗を補佐して東軍のために働くつもりであった。

あるいは、吉統は黒田如水の勧告や吉弘統幸の諫言（かんげん）で、自分の選んだ道が誤っているようにだと感ずいたかもしれない。しかしもう引き返すことはできなかった。豊後へ出発



吉弘統幸は、吉統を翻意させることをあきらめた。吉統と別れて、予定通り江戸の能乗のもとへ行こうかとも考えたが、死生の岐路に立っている吉統を見

捨てることは、誠実な統幸としてはできなかった。彼は涙をためて言った。

「豊後へお供つかまつる」

「そうか、頼むぞ」

吉統は最も力強い助力者を得た喜びに、声をはずませて統幸の手を握った。

豊臣秀頼から、挙兵の引き出物として与えられた武器、武具、馬などを満載した船団に、毛利輝元が提供した鉄砲隊百人も同乗して、運命の船出をしたのは、慶長五年（一六〇〇）九月上旬であった。このとき大友吉統は四十三歳、吉弘統幸は三十七歳であった。

豊後を目指す船団は、伊予灘をつききつて国東半島の富来城と安岐城の中間に着いた。富来城の笥（かけい、垣見）家純と安岐城の熊谷直陣（なおのぶ）は、いずれも豊臣恩顧の武将で、西軍加担の態度を明らかにしていた。この海浜に大友の旧家臣らが各地から、それぞれ船を手配して乗りつけ、吉統ら一行を待っていたという。

旧家臣らと合流した吉統の船団は、九月八日夜、木付（杵築）の沖を通り、高崎表に船を集結して一夜を明かし、九日夜明けと共に別府浦に下船を開始、陣を整えて立石に本陣をかまえた。鎌倉時代初期、幕府の豊後統治の先陣として、大友能直の弟古庄四郎重吉が、先遣隊を率いて別府湾より上陸し、まず布陣したのが立石であった。つまり大友が豊後統治の最初の足がかりの地である。

大友吉統がそのような歴史を知っていたかどうか分からない

が、くしき因縁の地における布陣であつた。

この時点での豊後各藩の旗色は、西軍側が富来、安岐をはじめ、府内、臼杵、佐伯の各藩。東軍側が木付、岡（竹田）の二藩。中立的立場をとっていたのが高田藩である。

立石に陣した大友軍は、まず木付城を攻略することにした。

木付城は、東軍側の細川忠興（丹後田辺城主）が、徳川家康から慶長四年に、速見、国東両郡を加増として与えられ、これを統治するため重臣の松井康之と有吉立行の両名を城代として木付城に派遣している。大友の軍が陣をしいた立石村は、速見郡内であり、木付藩領内であるから、まず東軍側の木付城を押さえおく必要があつた。

木付城側は早くそれを察知し、大友軍が立石に着陣する前に、速見郡内の庄屋や百姓頭など有力者多数を人質として城内二の丸に閉じこめたのである。

七年前、大友氏が改易になるまで木付城の城主であつた木付氏は忠義一筋の有力家臣であつたから、大友が再起の旗を挙げれば、木付の領内から、旧縁恩顧の者が蜂起（ほうき）するとは十分考えられる。そうならば一大事である。そこで領内有力者の動きを封じる先手をうったのだ。

⑦ 木付城の攻防

—— 統幸軍はたじたじに ——

大友軍としては、木付城が領内の有力者多数を城内に閉じこめたことは、攻撃を早める口実ともなった。

大友吉統は、立石に着陣の翌日、天徳寺統生、森津介ら使者

を木付城に送り人質を解放するよう要求。歴戦の将である松井康之らがこの要求に耳をかすはずはなく、厳しく城門を閉じ、応戦の備えはぬかりなく、大友軍の来襲を待った。

吉統は直ちに、吉弘統幸に岐部山城守、大神監物、柴田小六郎らを付け、兵二百騎をもつて強襲させた。

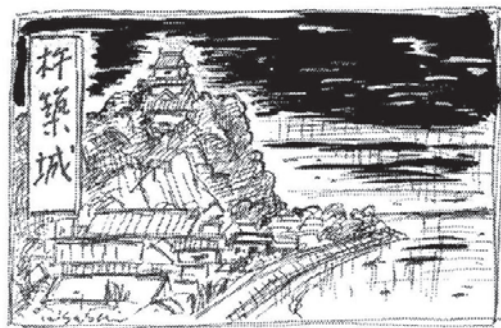
統幸は、日の沈むのを待ち、兵を二つに分けて一は南台の海岸より、

一は北台より攻撃の手はずを決めた。内応者が城内より火の手をあげるのを見て総攻撃にかかる。統幸はこの地方の地勢に明るく、知己も多い武將だ。内応者とのひそかな連絡も手落ちなく運んでいるのだ。

予定通り、日没と共に城内より内応者による合図の火があがった。これに応じて攻撃側は閨（とき）の声を挙げ、どつと攻め立てると、城内の内応者が城門の守兵に襲いかかり門を開く。城内の混乱に乗じて統幸軍は二の丸に突入できた。

ここで人質を奪い返し、勢いに乗じて本丸を攻め立てた。木付城はもともと天然の要害として知られており、かつて薩摩軍が豊後に侵攻したとき、木付城も攻撃したが、堅固な守りに攻めあぐねて退いた。それ以後「勝山城」と呼ぶようになったという。

戦いに強い松井康之らの厳しい指揮下に、城兵の反撃は鋭く、統幸軍の将柴田小六郎、海野天助が敵の銃弾に倒れ、攻撃軍は



たじたじとなった。そこへ黒田如水の大友討伐軍が近付いていくという知らせが入ってきた。

「無念だが、もはや長居は危険―」

統幸は、夜の明けぬうちに兵を素早く収め後退を命じた。軍は八坂莊真那井の浜から船に乗り、亀川に上陸して立石へ帰った。

黒田如水は、大友吉統の豊後挙兵の意志が動かないとみると直ちに討伐の手配にかかったのである。このとき如水の居城中津には、如水の長男長政が徳川家康方（東軍）に兵を率いて従軍しているので、留守居の兵士しかなかった。そこで浪人を募ることにし、蓄えていた金銀を城内の広場に積んで「われに奉公する者はこの金銀で召し抱える」と言い、募兵の触れを出したという。

当時の世相は混とんとしていて、市井には武士や百姓の浮浪している者が多かった。募兵の触れに、たちまち兵は編成された。

如水の用兵は迅速であった。九月九日に中津を出陣、翌十日早朝には高田城（豊後高田市）を包囲した。高田城主竹中重利は、豊臣秀吉の恩顧を受けた将であるが、今回の天下分け目の戦いには日和見の態度をとっていた。それで黒田如水は、東軍に付くよう重利に迫ったのである。

重利は如水の勢威に圧せられてその意に従い、長男重義に兵二百をつけて黒田軍に参加させた。

黒田軍は国東半島を横切り、赤根（現国見町）の峠を越えて、富来城（国東町）に迫り、続いて安岐城を包囲した。富来の笥（か

けい）家純、安岐の熊谷直陳は、ともに西軍方につき、既に出陣しているので、両城とも留守居のわずかな兵で守っていた。城の防備は固いようだが、攻めれば落とせるはずである。だが如水は威嚇（いかく）しただけで素通りしている。両城とも脅威を与えておけば動けないと計算済みである。

作戦に長けた如水は、豊後で挙兵した大友吉統の軍の勢力がふくれ上がらないうちに、早く討たねばならないから、国東半島の小城に時間をかけておれないと考えたのだ。しかし小城といえども後方の気になる敵方の城だから、ちゃんと嚇（おど）しておいたのである。

⑧ 黒田如水の好意

—— 吉統に二度翻意を進言 ——

黒田軍の先遣隊二千余が、時枝平太夫、井上九郎左衛門らに率いられ木付城に到着したのは、吉弘統幸の攻撃軍が撤退して間もなくであった。

時枝平太夫は、黒田軍を迎えた松井康之、有吉立行両城代から、吉弘統幸の率いる攻撃軍が激戦のすえ敗退した経過を聞くと、次のようにすすめた。

「敗退した軍勢は士気がゆるんでいる。直ちに追撃すれば当方に利がある。我ら討伐の先遣隊は時を与えずこれを追って立石の本隊を攻めよう。木付城軍も城を出て、大友討伐に加担してはどうか。木付城に乱入した許し難い大友軍を、我らと共に討伐すれば面目もたつというものだ。黒田本隊が到着する前に、我らの手で討滅しようではないか」

松井、有吉らはこの意見に激励されたかたちで賛同し、直ちに出勤を城兵に告げた。

木付城には、わずかな留守居の兵を置いて、時枝、井上の率いる黒田先遣隊と共に、十三日未明に木付を出発し、まず鉄輪に集結して立石攻撃の布陣をした。

木付軍は鶴見村から実相寺山に進んで上方から、黒田先遣隊は海沿いに進んで下方より立石の大友陣に迫る作戦である。

主戦場となった石垣原は、鶴見岳の山ろくが別府湾に流れ込む傾斜した原野で、火山鶴見岳の噴出岩が一带に散乱し、ススキに覆われた荒涼とした地帯であった。

両軍の戦力をみると、黒田勢は本隊まで加えて約三千。これに木付城兵二百、高田城から参加した兵二百。対する大友勢は、旧臣、百姓、雑兵を寄せ集めて約九百といったところ。従って戦力の差は歴然としており、黒田如水は余裕を持っていた。

また如水は、大友吉統に憐憫（れんびん）の情も抱いていた。かつて島津軍が豊後に侵攻した際、戸次川原の合戦で惨敗した味方を捨てて豊前に逃げ込んだ吉統を保護しており、朝鮮出兵の文禄の役では、吉統の率いる大友勢は黒田軍の第三軍に属し

て進撃しており、敵前逃

亡の咎（とが）で太閤秀

吉から吉統が罰せられた

際のいきさつも、如水は

同情を持って見ていたよ

うだから、できれば吉統

に再び過ちを繰り返させ



たくなかったのだ。

吉統が豊後下向の際、如水は長州上ノ関で船出を待つ吉統にひそかに使いを走らせて、思いとどまるよう勧告した。さらに決戦前日の十二日にも使いを立石に送って次のように翻意をすすめている。

「あなたが徳川方に味方すると私に約束したことを、私はまだ忘れていない。徳川方が勝つことは明らかである。たとえあなたがいったんの利をおさめても、それは無益のことだ。今からでも志をひるがえして、徳川方に忠誠をみせてはどうか」

だが吉統には如水の好意に答える心のゆとりはなく、十三日の決戦を迎えた。石垣原合戦を記した古記録は多い。参考までに記すと、「西治録」「豊州乱記」「黒田如水石垣原軍記」「大友義統公軍記」などが代表的なもののだが、これらの戦記のいずれも、吉弘統幸の壮絶な戦いぶりとその戦死の模様に関心をあてて述べているのが注目される。すなわち統幸の忠誠と見事な武人の最期が、敵味方を問わず強い感動を与えたのである。

ところで大友の再起をかけた、吉統の挙兵であるが、ここに馳せ参じた大友旧臣たちは、この一戦にはたして大友家再興の明るい望みを託したのであろうか。

「大友義統公軍記」に、いみじくも次のように記した個所がある。

…大友方の侍は、義（吉）統落居の後は浪人となり、田夫野人となり果て、なまじいに露命をつながんより、今にも事があれば討死せんと思いつつ、独り腹立てておりし節なれば、これこそ望むところなり討死せんと一足も退かず、手負い死人を踏

み越え乗り越え、腕の限りにおめき叫んで、当たるを幸い切りまわる。死物狂いの働きなれば…

石垣原合戦の大友方武人の覚悟は、このように希望のない悲壮なものであったのだ。

⑨ 吉弘統幸の戦死

— 敵味方を問わず感動 —

木付軍と黒田軍が、木付城攻めから撤退した大友軍を追って、意外に速やかに立石に接近したことを知った大友軍は、陣形を整えてこれを迎えうち、石垣原で戦端が開かれた。慶長五年（一六〇〇）九月十三日午前十時ごろであった。

吉弘統幸は出陣に際して、大友吉統に決別のことばを述べた。「嘉兵衛統幸は、ただ今より出陣つかまつります。生きて再び拝顔はおぼつかのうござります。殿にも相当のお覚悟をもつて臨まれますように」

「おう頼むぞ。無理せず必ず還（かえ）ってくれ」吉統にとつて、統幸は最も頼りにする武将であったから、最後まで生きていてほしかったのだ。統幸が敵陣にがむしゃらに突っ込むのを見て、再三使いを走らせて「引き返せ」と命じたり、援兵を送ったりしている。

最初の一戦は、石垣原に迎えうった大友軍に、黒田方の時枝平太夫、母里（森）太兵衛の軍が攻めかかった。つづいて松井康之、有吉立行の木付軍が実相寺山より駆けおりて白兵戦となった。

この戦いは、最初は大友軍の力戦で、時枝ら先頭の軍は押し

返されたが、後続の軍が襲いかかって接戦約一時間、大友軍が敗走を始めた。

これを追って行くと、小川の跡とみえる草原の向こうで、大友軍が備えを立て直して反撃に転じ、鉄砲を撃って襲いかかり、黒田勢は押し戻された。

このように押しつ押しされつの接戦であったが、多勢に無勢、大友軍の敗色が濃くなった。

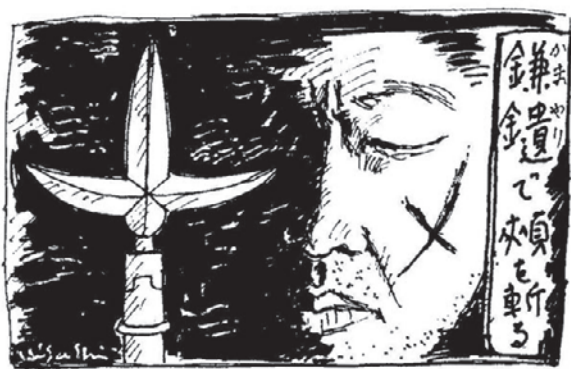
この激戦のさなか、吉弘統幸は黒田軍の将井上九郎左衛門と一騎打ちとなり、戦死をとげた。この死闘のありさまを「黒田如水石垣原軍記」は、次のようになまなましく描写している（現代文になおす）

…かかる所に大友の侍大将吉弘嘉兵衛統幸という大剛の武士が、井上九郎左衛門と面を合わせた。両人は野原の小さな堀を隔てて向き合い、「やあ、久しぶりであったな、井上殿」「おお、

吉弘殿か。一別以来だな」と懐かしげに言葉をかけあった。

先年、高麗陣（朝鮮出兵）のさい知り合い、共に戦い、また主家封除後、しばらく井上家に身を寄せていた旧知の仲であった。

だが一足も退かず「いざ、尋常に勝負」と互いに鎧（やり）をあわせて血戦となった。九郎左衛門のくり出した鎌鎧（かまやり）が、嘉兵衛の頬（ほほ）をしたたかに



斬った。嘉兵衛も鎧で九郎左衛門の胸を突いたが、具足の上からであつたから鎧は通らなかつた。重傷を負つた嘉兵衛は、若党の肩に支えられて退き絶命した。

…嘉兵衛討ち死にの時、その手の者、兵八十三騎、雑兵九十七人は、その場を少しも退かず、共に皆討ち死にした。嘉兵衛は、ひごろ情ある者で、武の道に達し、将の器ある人であつた。故に皆死を共にしたという。――

この戦記は黒田方で記述したものが、敵の吉弘統幸をたたえている。統幸の忠誠ぶりと壮絶な戦死に対して、敵味方を問わず感動したのだ。

右翼の大將吉弘統幸の戦死に続いて、左翼の大將として奮戦していた宗像鎮統（しげつぐ）も討ち死にした。鎮統は大友家改易の後、田原紹忍と共に竹田・岡城主中川氏のもとに厄介になつていたが、吉統の旗揚げに応じて、中川氏の許しを得て紹忍と共に参戦していた。

このほか大友方の将兵の戦死が続出し、吉統は敗軍をまとめ、日没前に立石に退かせた。

大友軍敗北の知らせを黒田如水が受けたのは、如水の本陣が日出のあたりまで来たときであつた。如水はこれ以上安易に立石を攻めるのを禁じ、自分が到着するのを待てと命じた。如水が実相寺山に陣したのは日が暮れてからであつた。如水は石垣原合戦には直接指揮しないで勝利を得たのである。

伝承ではあるが、戦功を証するため、翌日、敵の首実検を如水がしたさい、吉弘統幸の首級をつくづく眺め、「武門の習わしとはいえ、惜しい人物を死なせたものだ」と、酒を首級に献

じ、家来に命じて、西国東郡都甲村屋山の吉弘家菩提（ぼだい）所に葬らせたという。

⑩ 大友吉統降伏

—— 家康に助命を願う如水 ——

大友吉統の豊後拳兵に対して、肥後の加藤清正も討伐に加わるはずであったが、間に合わなかった。

大友拳兵の知らせは、木付城の城代松井康之が使者を肥後に走らせたのである。だから清正は木付城攻撃の大友軍と対戦するつもりであったようだ。

知らせを受けたとき清正は、肥後半国を領していた小西行長の居城・宇土攻撃の出動にかかっていた。西軍側の小西行長は関ヶ原の戦線に出向いているから宇土は城代が守っていたのだ。松井からの知らせを受けた清正は、宇土攻めを急ぎよ大友討伐に切り替え、先発隊として鉄砲五十挺、兵五十を出発させた。清正が本隊を率いて熊本を発ったのは十四日早朝であった。十五日に小国まで進んだときに、黒田如水や松井康之から戦勝の知らせが届いた。

別府堀田温泉から湯布院への観光道路をしばらく行った道路わきの高台を「旗の台」と呼んでいる。別府の伝承では、清正の派した先発隊が、この地まで着いて軍旗や馬印の旗を立て、休息したときに石垣原戦終局の知らせを受け、熊本へ引き返したと伝えている。

大友吉統は自軍の惨敗、そして頼りにする統幸ら諸将の戦死を知ると、落胆のあまり自刃しようとしたが、田原紹忍に止め

られ、降伏の道を選んだという。

降伏については、如水が母里太兵衛を大友の陣に送って降伏をすすめ、吉統はこれに従ったと

も、田原紹忍が母里太兵

衛と連絡をとり、降伏の取りなしを頼んだともいう。

降伏に反対する家臣も多かったようだ。吉統に向かって「大友累代の佳名を朝鮮の役で失わせられたが、この一戦でいさぎよく討ち死にあそばされなば、御恥も少しは軽くなりましょう。降伏は恥の上ぬり、口惜しいことです」と涙ながらに訴える者たち、また「今より偽（にせ）の首級を持つて黒田陣に駆け込み、裏切りによつて主君吉統の首級を持参した、といって如水に接近し、如水を討ち果たす。そのどさくさにまぎれて、浜脇より船で逃れ、佐伯の柵牟礼城に立てこもつてほしい」と徹底抗戦を主張する者たちなど、陣中は揺れたが、徳川に仕えている吉統の長男能乗のことを考えれば、降伏が最善となった。

吉統は、白昼に降伏のみじめな姿をさらすのを恥じ、如水の承認を得て、十四日の日没後、僧衣をまとい、髪をそり落とした姿となり、主従十人で実相寺の黒田陣に出頭した。

如水は吉統の身柄を中津城に送って幽閉し、後に大阪に出陣している長男黒田長政のもとに送り、家康の処分を待った。如水は最後まで吉統を不憫（ふびん）に思っていたようで、家康に吉統の助命を願った。家康はそれを聞き入れ、出羽国（秋田県）



へ流した。のち常陸国（茨城県）宍戸（ししど）に移り、この地で慶長十年（一六〇五）七月十九日没した。四十八歳であった。一日の合戦で勝敗が決した石垣原戦の二日あと、すなわち九月十五日に関ヶ原の決戦が展開された。これも一日にして東軍徳川家康の勝利に帰した。

大友吉統を西軍に引き入れた西軍の総大将毛利輝元は、関ヶ原戦ではどんな働きをしたか。さすがに彼は策士であった。戦局を傍観して大阪城から動かなかったのである。

また関ヶ原に出陣して東軍の背後を脅かす位置にあった輝元の長男秀元と一族の吉川広家の軍は、ひそかに東軍と内通して、攻撃をひかえ最後まで動かなかった。

さらにこれも毛利一族の小早川秀秋は、積極的に裏切つて西軍に攻めかかり、東軍勝利のきっかけとなった。このため戦後処理では、毛利家は封土削減だけですみ、吉川家は本領安堵（あんど）、小早川家は封土加増となった。

ところで豊後では、石垣原戦のあと、その後遺症ともいうべき痛みが残つて、佐賀関合戦を引き起こしてしまった。

⑪ 余波、佐賀関合戦

— 大きな犠牲払った岡藩 —

石垣原の戦いの巻き添えをくつて、大迷惑を受けたのは竹田・岡藩主中川秀成である。

秀成は黒田如水や加藤清正とも連携を保ち、また家老の中川平右衛門など重臣に七百余の兵を率いさせて東軍（徳川方）の戦列に加えさせるなど東軍加担をはっきりさせていた。

しかるに自分の所へ寄食していた大友の旧臣田原紹忍、宗像鎮続が石垣原戦に参加することを願ひ出たさいこれを許した。武士の情けとして当然のことだが、このとき紹忍らが中川家の紋旗をこっそり持ち出し、立石の本陣に立てた。つまり戦略に利用したのだ。

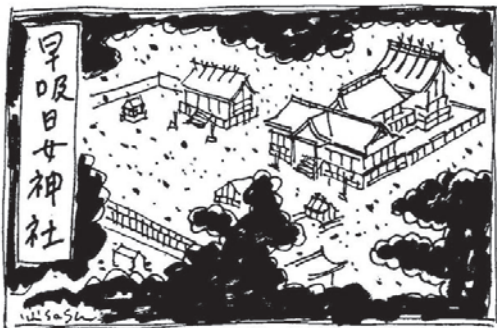
「すわ岡藩の中川が西軍側の太友に加わった」と黒田如水は徳川家康に報告したのである。

西軍に加担の誤解を受けた中川家としてはお家の一大事だ。家臣を家康のもとに送って陳弁に努めると共に、石田三成の与党である臼杵の太田一吉を討つことで逆意の無かったことの証（あかし）とすることにした。

事件の張本人である田原紹忍は、そんな事件を引き起こしているとは知らなかった。大友吉統の降伏を見送ったあと逃亡して行方をくらましていたが、数日後に岡藩の船奉行として、藩の飛び地の太分郡今津留に駐留していた柴山勘兵衛を頼って姿をみせた。岡藩に寄食中に知り合った勘兵衛を介して岡藩の臣に取り立ててもらいたかったのだ。

勘兵衛は、紹忍が起こした事件で、岡藩が危殆（きたい）にひんしていることを知らせ、臼杵藩攻撃に従軍し、決死の働きをもって罪を償うよう説得した。紹忍も責任を感じ従軍することにした。

岡藩では軍の主力は重臣中川平右



衛門が率いて徳川方応援のため大阪に行っているの、郷土や農民まで加えて軍を編成して、九月二十八日に出陣し、臼杵城の南方無礼山（陣山）に布陣、臼杵城と対峙（たいじ）した。一方、命を受けた今津留の柴山勘兵衛は、十月一日、手勢を率い、海岸沿いに臼杵へ向かった。この中に田原紹忍も加わった。

勘兵衛の一行は、保曾（坂ノ市細）の浦で、偶然にも大阪から帰国する中川平右衛門の軍と合流した。

中川の軍は、主家の一大事を知って、急ぎ帰国の途につき、途中で主君中川秀成が臼杵へ出陣したと聞き、海路臼杵を目指したが、海が荒れたため保曾の浦へ上陸したのだった。

中川、柴山合流軍は、まず臼杵藩の交通の要所である佐賀関を突破する作戦を立てた。佐賀関では、来襲を知った臼杵藩の強力部隊九百が、上浦、下浦を固めて待ち構えていた。

十月三日、佐賀関半島の有屋峠で両軍が激突した。両軍は押しつ押しされつ、潮見山、鍋倉山、左義長鼻（さぎちようはな）、素峨（すが）山など、半島先端の狭い地帯で白兵戦を展開したが、勝負がつかないまま日が暮れ、戦いは翌日に持ち越した。

十月四日早朝から戦いは再開された。「西治録」によると、田原紹忍が下浦の民家へ火をかけさせたという。この火が上浦へ燃え移り、関の神社（早吸日女神社）の神主、社務の家を焼き尽くした。

怒った神主関作之丞は、駆けつけた神社関係者や土地の人々と共に臼杵側に味方し、中川軍に接近して鉄砲を乱射した。この鉄砲が総大将中川平右衛門に当たって討ち死に。これをきつ

かけに中川軍は総くずれとなった。主な武将は戦死、田原紹忍も討ち死にした。

中川軍は戦死者二百数十人、負傷者二百余人を出して敗退した。臼杵軍は、中川平右衛門ら武将の首級を臼杵城に持ち帰り、城の塀上にさらした。

岡藩主中川秀成はこの大敗北に怒り、臼杵城に猛攻を加えたが容易に落ちなかった。だが臼杵城主太田一吉は、関ヶ原戦の石田三成惨敗を知り、戦いの継続を避けて、城を脱出したので、中川秀成方の勝利となった。

徳川家康は、最初この臼杵城攻めはなれ合いではないかと信用しなかったようだが、岡藩が家老以下多くの家来を佐賀関合戦で失ったことを知り、中川秀成への疑いを解き、岡藩六万六千石は本領安堵（あんど）となった。それにしても、田原紹忍の軽率な行為に、岡藩は大きな犠牲を払わされたものである。

石垣原合戦の余波はこれで終息した。



あ と が き

郷土の歴史をひもとくと、戦乱がたびたびこの地域をおおい、権力者や武將の興亡がくりかえされています。しかし郷土史には、その戦乱のいきさつは、ごく簡略に述べられていて味気ない感じがします。そこで私は、争乱の原因から結末までを興味深くさぐってみました。また合戦は勝者も敗者も、人間的な苦渋に包まれる点が多々あります。ひとたび戦乱が起ると、いうまでもなく被害を最も多く受ける者は領民であり、数かぎりない兵卒の犠牲が背後にあります。それらに思いをはせながら、興亡に死生をかけた武將の言動を想像し、その哀歓を描くべく物語を展開しました。その目的を充分に描きえたかどうか、それは読者の判断におまかせするしかありません。

各地の戦乱は、平安時代末期に武士が権力を握ってからの角逐が主で、鎌倉時代から南北朝争乱、そして戦国時代を経て、徳川幕府統治の平和時代到来で終わります。豊後における合戦は、大友家の内紛による戦いや周辺へ侵略する小合戦まで加えると、相当な数にのぼりますので、主な合戦にしばらく、源平合戦の波及で緒方三郎惟栄の宗佐八幡襲撃から大友家終末の石垣原合戦までの九つの合戦をとりあげました。

この連載が始まってから、多くの読者の方から手紙や電話をいただき激励されました。有り難うございました。それらのお便りの中には、先祖が合戦にも参加した武將で、代々伝えられた系図をお持ちの方もあり、郷土には脈々と歴史が伝えられ生きていることを実感しました。

この物語に、二紀会委員菅久さんの歴史への深い思索のこもった挿絵で精彩を与えて下さいました。また二年間の連載にわたり、大分合同新聞論説委員長の狭間久さんの助言と激励をいただきました。深く感謝申し上げます。

平成十二年一月

渡辺 克己



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「豊後の武将と合戦」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタル版「豊後の武将と合戦」 第十八章●石垣原合戦と大友吉統 ②

2008 年 10 月 3 日初版発行

著者 渡辺 克己

原著 2000 年 2 月 15 日発行／発行：大分合同新聞社

／制作：大分合同新聞社文化センター／印刷：小野高速印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

(〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内)

© 大分合同新聞社、渡辺克己、菅久

◇著者略歴◇渡辺克己

大分県佐賀間町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、芸芸部の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退社。昭和二十七年から同四十三年まで大分市社会教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。

郷土史を研究し「大分今昔」「豊後の磨崖仏散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」等の著書。